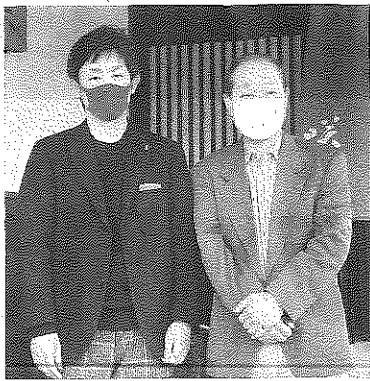


茨城の写真館 宿泊業進出

サービス業、事業転換に挑む

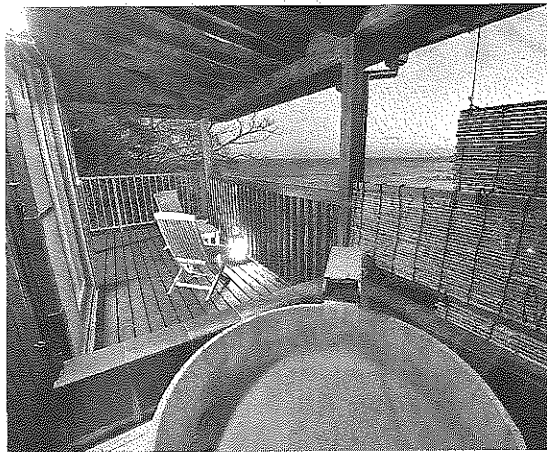
コロナ禍で事業モデルの転換が課題となつているサービス業。主力のデジタル業の不振に悩む小野写真館（茨城県ひたちなか市）は静岡県の高級旅館を買収し、畑違いの宿泊業に進出した。コロナ収束後に復活するとみる「感動体験」の需要にフォーカスし、祖業の写真と宿泊を融合した事業で再起動を図る。

「河津桜」で知られる静岡県河津町の丘の上に立ち、太平洋を一望する高級温泉旅館「桐のかほ



「咲楽」の買収を決めた小野社長（左）と元オーナーの萩原さん（静岡県河津町）

伊豆の高級旅館買収 祖業と融合し「感動体験」へ



「咲楽」の全4室は海を一望でき、タイプの異なる露天風呂を併設している

り「咲楽（さくら）」。「2020年10月に買収した小野写真館の小野哲人社長は「売り上げが落ちた状態でキャンセルも思ったが、ここまで落ちなければ決断できなかった」と振り返る。

1976年創業の同社は写真撮影から始まり、2代目の小野社長がプライタル業を主力事業に育てて売上高16億円を超える企業に成長させた。だが20年春以降はコロナ禍で結婚式中止や延期が続出し、業績は急速に悪化。「4〜5月は8割ほ

ど売り上げが減り、これが続けば会社がなくなりかねない」と危機感を抱いていた。

そんな中で知ったのがビジョナル・インキュベーション（東京・渋谷）のM&A（合併・買収）サイト「ビズリーチ・サクシード」に載っていた「咲楽」の売却案件だった。もともと宿泊業に関心を持っていた小野社長が7月に足を運んで買収を決断。経営していたオーナーの萩原長文さん夫妻にアプローチした。06年に開業した同旅館

は全4室。各室に露天風呂を併設し、地域の新鮮な海産物や野菜、牛肉を使った料理を手間暇かけて提供している。「団体から個人へ旅行の流れが変わる中、代々引き継がれるような質の高い宿にしたかった」と萩原さん。料金は2人で1泊7万8万円。リピーターが多く、予約の取りにくい旅館とされてきた。

売却の理由は後継者難だ。萩原さんの2人の息子のうち長男は東京の会社に勤め、次男夫婦にも家庭を大事にしたい気持ちが強かった。「旅館は一般の人が休む土日に忙しく、子供の教育に制約となりやすい」（同）。息子への承継を断念し、

M&A仲介会社に声をかけるなどしていた。買収を巡っては全国展開している宿泊サービス会社と、テレワーク拠点への活用を図る大手物流会社も高い金額を提示していた。最後は小野写真館が選ばれ、10月に契約を結んだ。萩原さんは「お客さんに感動を与えたい理念が一致した」ほか「写真技術を生かして新しいチャンスを生み出そう」という発想に感銘を受けた」と説明する。

小野社長の狙いは温泉や料理だけでなく、記念撮影や祝いも楽しめる「祝い宿」だ。自然の中で記念写真を撮りたいカップルなどのニーズに対応するため、旅館に併設した1日1組限定のフォトスタジオ「アンシャンテ伊豆」を31日に開業させる。周辺に海や河津桜があり、海外のように自然の中で撮影できる点をアピールする。

旅館で結婚や還暦を祝いたい家族にも利用を呼びかける。2月下旬には新郎新婦と家族らの計11人が2泊3日で4室を借りる予約が入った。コロナ禍で大勢による挙式が難しくなるなか、規模の小ささを生かして貸し切り需要を取り込む。

同社は買収後、旅館のパート4人を引き継ぐとともに、カメラマンスタッフ2人を派遣している。プライタル事業で料理経験があるスタッフも

送り込み、萩原さんら料理の引き継ぎも受けつけた。

政府の宿泊促進事業の打ち切りや緊急事態宣言の発令など、宿泊業を取り巻く現状はプライタルと同じく厳しい。買収後は順調に予約が埋まった咲楽も今年はキャンセルが増えている。同社にとって宿泊業は未知の領域だけにリスクはつきまとう。

それでも小野社長は「我々サービス業は不急の産業とされてしまつたが、旅行や体験に人は戻ると強調する。『感動体験の創出を目指す』、アクセルを踏むところは踏み込む」構えた。（水戸支局長 竹蓋幸広）